

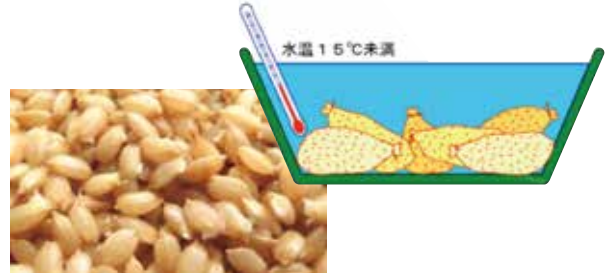


健苗づくりに向けて

育苗期間は気温の変動が大きく低温になることもあり、ハウスの温度管理と水管理が大切となります。昼間の高温に注意するとともに夜間の低温にも気を付けましょう。基本技術を守り、根張りのある良い苗で米作りをスタートしましょう。

浸種・催芽

- ①浸種は屋内または日陰でおこない、直射日光等による急激な水温の上昇がおきないように注意し、外部からの異物混入を防ぐため容器には蓋をします。
- ②浸種水温は10～15℃未満で行いましょう。低水温(5℃以下)は発芽率の低下を招き、高水温(15℃以上)は、ばか苗病の発生リスクを高めます。
- ③催芽温度は30～32℃とし、温度計を必ず設置し確認をしましょう。



育苗管理

- ①育苗期間中ハウス等の温度は、出芽時(30～32℃)、緑化期(昼:20～25℃、夜:10℃以上)、硬化期(昼:15～20℃、夜:5℃以上)を目安とします。温度が高いと「ばか苗病、もみ枯細菌病、苗いもち病」の発生リスクが高くなるので、温度管理を徹底しましょう。
- ②温度計は、苗箱付近の高さに合わせて設置し測定しましょう。



育苗中のかん水

- ①緑化以降は、根の呼吸も活発になります。この時期にかん水量が多いと、床土が過湿となり根の呼吸が妨げられ、マット形成が不良になります。育苗初期は、午前中に1回充分にかん水します。
- ②育苗後期には、1日1～2回を目安にかん水を行います。夕方のかん水は、温度低下や徒長苗となるため避けましょう。風等で育苗箱の隅が白く乾いてしまう場所は、その部分だけかん水することがポイントです。



排水溝の点検と生育状況を確認しましょう

①気象および麦の生育状況

降雨、降雪の日もありましたが、現在の生育は平年並となっています。排水ができていないか溝の点検や補修を行い、湿害を防ぎましょう。また播種時期により生育に差があるため、ほ場の生育に応じた管理をしましょう。

②収量確保に向けた管理

①排水対策

排水不良による湿害は、収量・品質の低下を招きます。明渠に滞水している場合は溝さらえ等を行い、速やかに排水しましょう。



排水溝がふさがっており、溝さらえが必要

②施肥(大麦・小麦共通)

●分施肥系の場合

2月下旬～3月上旬に窒素成分で3～4kg/10a程度実施しましょう。

●全量基肥施用の場合

茎数が十分確保できている(茎数400本/m²以上)ほ場では、追肥の必要はありません。ただし、分げつ不足(茎数400本/m²未満)の場合は、2月中旬～下旬に窒素成分で1.5～2kg/10a程度追肥してください。

茎数 400本/m²以上の大麦ほ場(例)



追肥不要

茎数400本/m²未満の目安



2月中旬～下旬に1.5～2kgN/10a追肥